



発行

財団法人 東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合

1-14-2

☎ 0423-73-5296

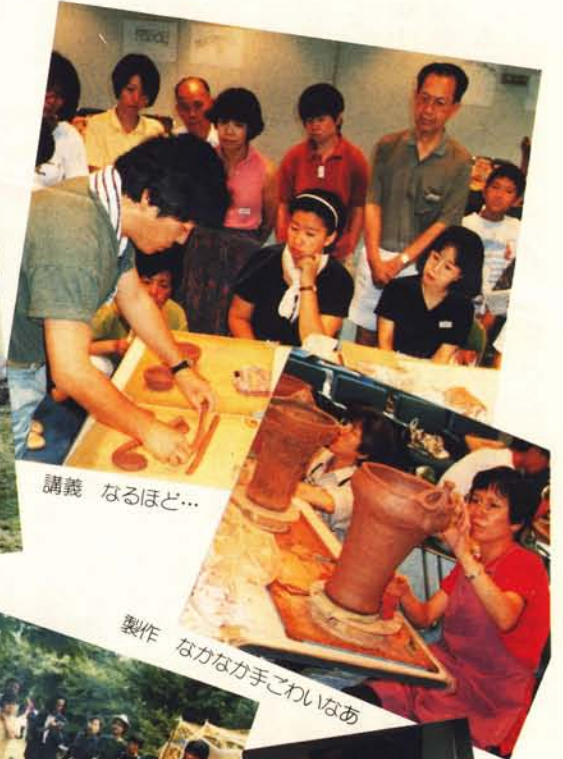
平成8年10月20日

たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No. 38 平成8年10月20日



完成 3日間の苦勞が報われ ホッ!



講義 なるほど...

製作 なかなか手ごわいなあ



焼成 どうぞ割れませんかように...



さあ これから焼成だ



できました!

縄文土器作り教室 今年は8月22・23日に製作し、3週間の乾燥を経て、9月15日に焼きました。右上から時計回りの行程になります。

埋蔵文化財センターの役割

所長 川島 春夫

当埋蔵文化財センターでは、現在、多摩ニュータウン地域をはじめ、汐留・市ヶ谷・西国分寺など、都内の七ヶ所で発掘調査と整理作業を行っている。

考古学への関心の一つは、われわれの先人たちがどのような生活を営んでいたかを知ることであろう。その様子を探り当て、多くの方々に公開していくことが、わたしたちの役割である。

しかしながら、先人たちの生活を探ることは、容易なことではない。それは炎天、寒風の中で遺跡の発掘にあたり膨大な遺物の調査研究に携わる、大勢の人に支えられている。

それ故、新たな発見には関係者が一様に喜び、感動を共にする。遺物から先人の偉大さを学び、ロマンを感じる。このことを多くの人々と分かち合っていきたいと思う。

将来にわたって貴重な文化財を保存するため、センターは開発者と調整を図りながらこれからも発掘し、調査研究を続けていく。新たな発見に向けて、また都民の皆様方の期待に応えるべく、いっそう努力してまいりたい。

遺跡だより ④7



武蔵国分寺北方地区遺跡
縄文時代早期末の集落

平成七年度から、西国分寺分室では旧中央鉄道学園跡地の遺跡調査を進めており、これまでに二地点を調査しました。一方はマスコミを賑わせた東山道武蔵路の地点です。もう一方が、ここに紹介する縄文時代早期末を主体とする地点です。

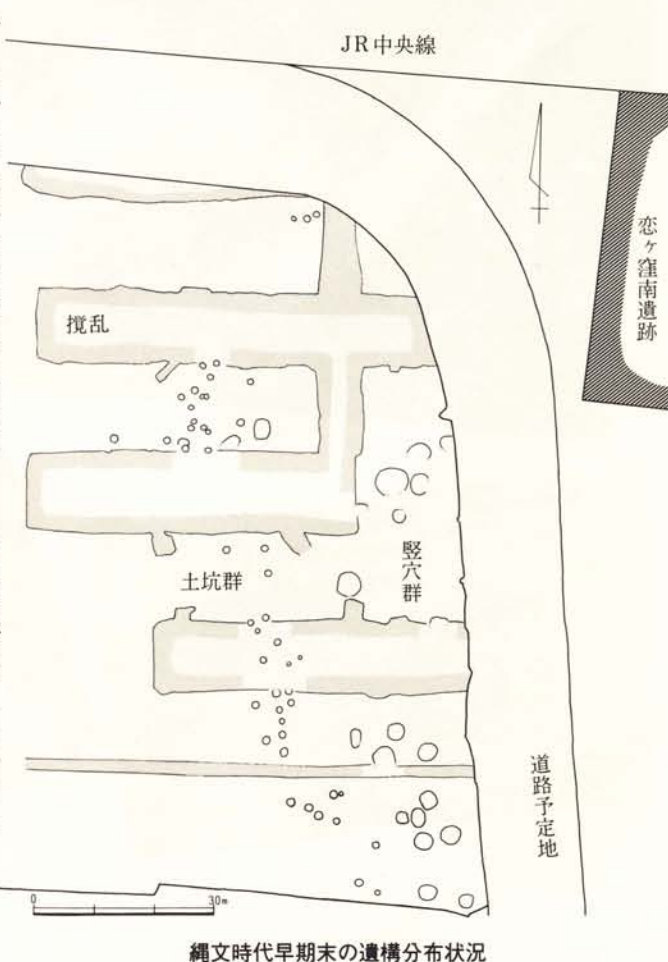
この調査地点は、学園跡地でも北東角で、JR中央線に近い場所にあります。

その東側には、昭和五十九年から六十一年に調査された恋ヶ窪南遺跡があり、早期末の住居跡と土坑、中期初頭の住居跡と集石等が発見されています。今回調査したこの地点は、この恋ヶ窪南遺跡の広がりとして想定されますが、中期初頭は土器等の出土量こそ多かったものの、一基の土坑が検出されただけで、主体は早期末

でした。そこで、当該時期の遺構群を抽出して図示しますが、遺構の分布には興味深いものがあります。中央西寄りには、直径が1m前後、深さが0.3mから1m程の円形土坑群が50基ほど、縦に弧を描くようになつていきます。この土坑群は、建物の基礎で攪乱された範囲にも幾つか存在したようです。土坑群を境に、西側には遺構が見られません。

東側には竪穴住居跡（炉跡のあるもの）と竪穴状遺構（炉の存在がはっきりしないもの）が分布します。これら二種類の竪穴遺構は、やはり恋ヶ窪南遺跡でも検出されており、このことからひとつの集落を構成した可能性が考えられます。しかしながら、集落の西はずれに土坑群が配置されているのか、見かけ上だけなのか、この土坑群の性格をどのように捉えるべきかなどは、まだ検討の余地があります。これらの問題については、来年度以降に実施する外周道路予定地の調査成果を踏まえて検討し、この興味深い早期末の集落の実態を明らかにしたいと考えています。

(岩橋陽一)



掘り出された都市
江戸・長崎・アムステルダム・ロンドン・ニューヨーク
Unearthed Cities
Edo Nagasaki Amsterdam London New York
1996年10月8日(火)
～1997年1月12日(日)
江戸東京博物館 1階 企画展示室

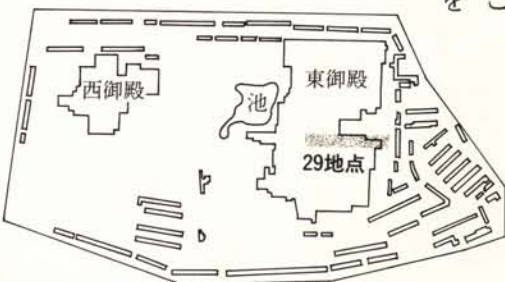
掘り出された都市
江戸・長崎・アムステルダム・ロンドン・ニューヨーク
1996年10月8日(火)～1997年1月12日(日)
江戸東京博物館 1階 企画展示室

近年、都内では、江戸遺跡の発掘調査が盛んに行われており、その成果は都市江戸の形成過程や生活の実態を示すものとして、各分野から注目されています。本展覧会は、旧都庁跡地の丸の内三丁目遺跡をはじめとする江戸遺跡や、長崎市内、出島跡、および17世紀から18世紀にかけて急速に成長した欧米3都市の遺跡の発掘調査成果を紹介するものです。都市の構造と歴史、人びとのくらしや交流、流通などを考古資料によって展示いたします。

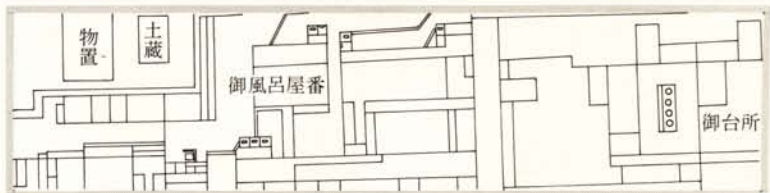
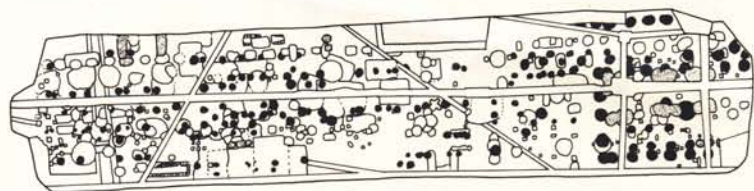
市谷御殿の構造

尾張藩上屋敷跡の市谷邸に關わる御屋敷絵図は、明和四（1767）年の屋敷地の追加拝領を境として、それ以前の東御殿のみの絵図と、拝領後に造営された西御殿を含む東西両御殿の描かれた絵図に二分されるようです。これらの絵図を

文化財講座 <28>
大江戸掘りもの帖～其五～



市谷邸の御殿建物配置



第29地点の遺構配置（上）・「御殿中惣図」より抜粋（下）

もとに、建物の配置や規模を窺うことができません。

平成七年度の調査で検出された礎石・石組溝等の出土状況を、「御殿中大奥向共惣図（幕末）」と照合し、この場所が東御殿の玄関付近に相当することが確かめられました。

また、やはり東御殿の一角に含まれますが、別の調査地点は御右筆部屋（執務室）付近の遺構群と確認され、廁の存在も、発掘調査の所見や絵図および寄生虫卵の検出から明ら

かになりました。

こうしてかなり具体的に屋敷の配置が特定出来るようになりました。

いま第29地点の西側半分の調査を終えたところですが、数基のかまどが大形の礎石跡に囲まれて現れ、台所と判明しました。かまどの焚口部には炭や灰が詰まっており、切石の火床面が真赤に変色していました。このかまどの位置は、幕末頃の「御殿中惣図」の御台所に一致します。

また、所々に桶や木枠あるいは大甕が埋設されており、この位置が絵

保存科学室「ぼれ話」(二)

昨年一月に起きた阪神大震災の被害は、いまでも私達の記憶に新しい。震度7で高速道路の橋げたが落ち、橋脚が崩れたりしたのが、一年八カ月ぶりに復旧したという。



地震で怖いのは、とくに低地で起きる液状化現象である。地盤が揺さぶられて軟弱化し、圧縮されている水と砂が噴砂となって地表に噴出する。とくに、活断層が走っている所では建築物が倒壊したりするから、被害も集中する。地震列島の宿命というべきか。しかし先人は、幾度地震に見舞われても、焦土を整地しては槌音高く復旧してきた。

こうした、特に遺跡調査で発見される噴砂や断層の事例を整理、分析

して史料などに対照し、地震の年代や震度を割り出す研究が、いま「地震考古学」として進められている。我が埋蔵文化財センターの調査で、丘陵地で初めてこの噴砂現象を確認し（多摩ニュータウン No.211遺跡——本紙No.33参照）、次いで汐留遺跡でも捉えられた。前者は、縄文時代中期以降から弥生時代までの間にかけて、後者は、元禄地震（1703）と関東大震災（1923）に特定されている。この発見にあたっては、とくに理学博士・服部仁氏に負うところが大きい。当センターの七月の文化財講演会（写真）では、噴砂現象と判断されたその根拠について、詳細な資料をもとに解説され、参加者一同が地震への認識を深めることができた。（上條朝宏）

第13回安全の日と標語

七月一日の当センターの創立を記念して「安全の日」とし、毎年、安全標語を募集してきました。今年的第一席には、奥川弘子さんの次の標語が選ばれました。

危険な方法 危険箇所
気づいた時が直す時

定例文化財講座の開催

本年度の第1回として、七月六日(土)に、鹿島建設技術研究所顧問の服部仁氏による「地震と考古学」の講演を行いました。「保存科学室こぼれ話」参照。参加者は115名を数え、大盛況でした。

第2回として、八月三日(土)に、当センターの山本孝司調査研究員による「縄文時代の粘土採掘」の講演と、映画「奥三面のドつくり」を上映しました。炎暑にも関わらず、参加者は89名を数えました。

第3回として、十月五日(土)に、文化庁美術工芸課の原田昌幸調査官による「縄文人の精神文化―土偶」の講演と、映画「ゼンマイ小屋のくらし」を上映しました。148名というこれまでにない参加者数を記録し、会場が熱気に包まれました。



原田氏の講演スナップ

研究活動への助成

平成八年度の職員研究助成(個人)が、左記のように決まりました。

西山博章「弥生時代における畑作経営」

分室だより

汐留分室 江戸時代初期に埋立てられた仙台藩屋敷地の施設に伴い、人骨が発見されました。なお、十一月九日(土)の12時30分から15時30分の時間帯で、現地説明会を催します。鉄道創業期の駅舎およびプラットフォームなどが今回の見どころです。

市ヶ谷分室 新庁舎の一部完成を横目に、調査に追われる日々です。西御殿の一角の31地点の調査で、拝領以前の出雲広瀬藩と思われる礎石跡が多数検出されています。

板橋分室 整理期間も残りわずかになりました。菅原神社台地上遺跡は弥生時代の大集落ですが、弥生の石器が沢山あることがわかりました。鉄器の研磨に使ってピカピカになった砥石や定型的な磨製の石斧は、興味深い資料になりそうです。

新川分室 柴田勝家の孫にあたる勝重の屋敷跡を調査中。建物跡や地下式坑、六道銭を伴う土坑などを検出。また二万五千年前の石器群も多数出

土しています。

日の出分室 整理作業に入って半年余りが過ぎ、四苦八苦していた接合や復元作業にも慣れ、これまでに250個体ほどの土器を復元しました。

西国分寺分室 先にお伝えしました縄文時代の調査とともに、下層を調査しています。ソフトローム層から石槍の製作跡が6地点・礫群3地点、第1黒色帯にも礫群と黒曜石剥片の集中箇所が見られ、調査の進展によりその数が増えそうです。

南大沢整理所分室 愛宕から引越して早くも4カ月が経ちました。南大沢の地にも慣れ、整理作業もいよいよ佳境に入ってきました。

外国人研究者の来訪

左記の研究者が当センターを来訪して展示施設や保存科学室、遺物整理室などを視察し、職員と親しく意見を交換しました。

六月二十日(木) 江上幹幸氏の案内で、ハッサン・アムバライインドネシア考古学者協会会長。

九月十一日(水) 「掘り出された都市」の展示で来日された、ニューヨーク市サウスストリート・シーポルト博物館のダイアン・ダリル考古主任学芸員。

九月三十日(月) 江坂輝弥、森

山哲和氏の案内で、中国の毛昭晰浙江省博物館名誉教授。

海外研修

第3回目の全国埋蔵文化財法人連絡協議会・関東ブロック海外研修が九月九日から十四日まで行われ、昨年と同じく中国の北京、西安の社会科学院考古学研究所などを視察してきました。今回の参加者は、総務課長佐藤修一、副主任岩橋陽一、副主任春名智美の3名でした。



明の十三稜にて

人のうごき

当埋文センターの設立以来、十六年にわたり歴史を共にしてきました所長石井則孝が、七月十五日付で勇退しました。その後任として、東京都教育文化財団・夢の島総合体育館館長川島春夫が就任しました。